

## (6) 人権教育研究会

会長 弘瀬 利英 (大用小学校)  
副会長 宮川 成也 (東山小学校)  
事務局 西田 知晃 (中村中学校)

### 1. 研究主題 「人権教育における授業の創造」

### 2. 研究経過

実施年月日	研究のあらまし	会場	備考
令和7年5月7日(水)	四万十市教育研究会 組織総会 内容：役員選出、研究主題設定、年間計画	中村中学校	13名参加
令和7年8月1日(金)	四万十市教育研究会 夏季研修会 ○研修会(講義) ・講師：川崎 健太郎 氏(特定非営利活動法人はらから) ・内容：「子どもたちのための人権学習をめざして～部落差別の現状から～」	中村中学校	13名参加

### 3. 活動内容

夏季研修会(8月1日(金))

○研修会(講義)  
・講師：川崎 健太郎 氏(特定非営利活動法人はらから)  
・内容：「子どもたちのための人権学習をめざして～部落差別の現状から～」

#### (1) 講義

##### ① 部落差別の現状

- ・ 暮らし、文化の中で歴史的に被差別部落やそこにルーツをもつ人々に対して、忌避・排除する日本独自の差別である部落差別。差別する側の意識に問題がある。
- ・ 2016年には部落差別の解消の推進に関する法律が制定され、部落差別が存在しているということが法律で定義され、部落差別は昔の問題ではなく、今、私たちが解決していかななくてはならない問題だということが明確化された。この法律の目的は部落差別をなくすことである。だからこそ、人権教育をするにあたって、差別をなくすための教育ってどういうものかを考えるべきである。
- ・ 今、起きている差別は、土地差別(住む場所での忌避)、結婚差別、ネット上での差別がある。差別する側も、こういうことをすることが差別になることがわかっておらず無意識に差別していることがある。人権教育で大切なのは、差別があって、乗り越えられない、相談できない、おかしい、差別だと言えない子どもたちではなく、差別にNo!を言える、仲間とつながって闘える子どもを育てていくことである。差別を乗り越えていける子どもをつくるのが人権教育。
- ・ また、YouTubeやX上で被差別部落をさらす行為、SNS上でも「実は部落出身だった芸能人」などといった投稿も見られ、今、子どもたちがこれらを日常的にふれている。このような

投稿に対して、これは差別じゃないかと気づいて、自分に何ができるか、差別を許さないと行動を起こしていかないと解決できない。

- ・ しかし、差別に対して無知・無理解・無関心な人の増加が懸念されている。(法務省 実態調査の結果から若い層でも知っている人・知らない人で二極化) また、同対法終了後の部落差別問題への意識の低下も課題である。

## ②子どもたちのための部落問題学習をめざして

⇒どのようにして「部落差別を解消するための教育」をしていくのか？

### 〈1〉 部落差別の現実を知る

- ・ 正しい知識（歴史や言葉、差別との闘い）、当事者との出会い（地域へのフィールドワーク、地域の人との出会い）、具体的な差別の実態を知る。
- ・ 差別の実態を具体的に、自分はどう捉え、どう行動するか？を考えさせる。
- ・ 部落差別の問題を「いま」の問題として捉えさせる。  
⇒部落差別解消法が有効。これが部落差別との出会いでもいい、これを入り口に色々な疑問を持たせたい。
- ・ 水平社宣言にこめられた思いを考えさせる。  
⇒「人間を尊敬」そもそも尊敬するってなんだろう？  
一人ひとりが尊敬される社会（学校）にしていくために、みんなができることは何だろう？（子どもたちが自分事として考えるきっかけに）
- ・ 賤称語をどう教えるか？  
水平社宣言では、あえて使って「エタであることを誇りに思う」と使っている。

↓

エタや非人といった言葉を私たちはどのように捉えるべきか。社会に欠かせない存在であったにも関わらずどうして差別があったのか？それがどのようにして差別につながっているのか？考えさせていく必要。

- ・ 本当のことかを確認する大切さを教えたい。（その情報の根拠は？適切な根拠か？誰が発信しているのか？）

### 〈2〉 差別をどう乗り越えていくのかを考える

- ・ 差別は「される人」がいるから起こるのではなく、「する人」がいるからおこる（いじめも同じ）
- ・ 差別とどうたたかうのか？ 差別に出会うのは地区の子だけじゃない。（むしろ仲間がいることが多い）差別とたたかわなければならないのは誰か？
- ・ 差別そのものを徹底的に否定する人権感覚が大事。  
⇒差別されている人々のためではなく、自分のために人権学習を学ぶ！  
そういう社会があるということは、自分が差別されることもあるということ。
- ・ 無自覚な差別（マイクロ・アグレッション）  
⇒何気ない言葉が差別を助長する。もっと差別の実態を知って、無知であることが課題であることをちゃんと考えていく必要がある。

### 〈3〉 本音で語れる仲間をつくる

- ・ 差別によって孤立したとき、誰かに伝えられることが大切。（一人で苦しまない。仲間の存在が大事）
- ・ 悩みや苦しみを伝えてもらえる自分になるには？（理解や共感の大切に気づかせる）  
⇒「わからない」や「知ったつもりになっている」ことを自覚するから、理解しよう、共感しようとするができる。
- ・ 「立場」や「ちがいを超えたつながり（多様性や相互理解）

### ③学校教育から人権文化を

- ・ 同和教育を通して先人たちが創りあげてきたもの＝「差別の現実から深く学ぶ」  
⇒自分自身が差別を残してしまっている社会の一員だということ。  
⇒子どもや保護者に寄り添う、すべての子どもたちに教育を。
- ・ 「無関心」な社会（差別を許す社会）は私たちの課題  
⇒みんなが関心ごと（自分ごと）になったら社会は変わる。  
差別する側が恥ずかしいな・おかしいなと気づけるように。
- ・ 差別問題に「関係ない」人はいない。  
⇒あなたは「差別を許す人」か「差別を許さない（無くす）人」かを問う。

### （2）意見交流

- ・ 自分自身と部落差別学習との関わりについて講義を聞きながら考えた。これまでの実践を若い先生にどうつないでいくか？自分でも何ができるか？考えている。
- ・ 自分事として捉えさせることは難しい。回数を重ねることも大事ではないか。部落差別との出会わせ方が難しいと感じていたが、解消法からスタートすることは大切だなと感じた。参考になった。
- ・ 同和問題だけでなく、他の人権課題も考えさせていく必要がある。  
しかし、部落差別問題を学んでいくと、差別への捉え方が他人ではなく、自分の方に向いてくる。色んな人権課題をカテゴリーに分けて学んでいくというよりも、人権課題・部落差別から何を学ぶのが大切。差別をする人がいるということが問題で、差別を肯定して、そういう社会をつかっていっているのは自分なんだと気付けるのが部落差別の学習。すべての人権課題につながっていく。同情論ではダメということに気付ける。
- ・ 同和問題と出会うことで「自己的人権感覚はどうか？」を考え続けることが大切で、それを生涯考え続けられることが大切ではないか。
- ・ 子どもたちには、人を大事にしよう、尊敬することが大切なんだということを大事にしたい。
- ・ 部落差別と出会う機会がない子どもたちにどう出会わせるか？

## 4. 今年度の成果と課題

### 【成果】

- ・ 夏季研修会において、現在の部落差別の現状を踏まえ、改めて人権教育の大切さを再確認できた。
- ・ 若年教員にとって部落差別問題や人権教育の意味を学ぶ機会をいただけたことは非常に勉強になった。
- ・ 研修会の後半の意見交流の中でこれまでの実践や、疑問などを交流し、人権教育において何が大切か考え、今後の実践に生かせる有意義な時間であった。

### 【課題】

- ・ メンバーが増えれば各校の人権教育の現状や、実施内容などをさらに深められると感じた。
- ・ 若年教員に、人権学習に関わる知識・実践をどうつないでいくかが課題となっている。ぜひ若年の先生方にもご参加いただけると、さらに有意義な研修になると感じた。